

## 第四章 古墳時代

### 第五節 名古屋の古墳時代の変貌

#### 前方後円墳の時代のあとに

前方後円墳の造営が終わり、六世紀後半を迎えると、横穴式石室をもつ小規模な円墳が、名古屋の各地でつくられるようになる。横穴式石室は、すでに五世紀末から六世紀初頭には、一部の前方後円墳で採用され始めていたが、この時期になってすべての古墳に普及した。いわゆる「群集墳の時代」と呼ばれる時期である。しかし名古屋では、数基の円墳からなる古墳群が主体をなし、数十基、数百基を擁する明らかな群集墳は、守山区の東谷古墳群を除いて形成されることがなかった。

この時期は、渡来系集団との連携により、名古屋中央部の集団が尾張全体の共同体の維持にかかわる職務をになうようになったと思われる段階である。ここに至る過程では、須恵器生産や鉄生産も開始され、手工業が発達するとともに、古墳造営にともなう土木技術の高度化もあったはずである。こうした五世紀から六世紀にかけた、いわば高度成長の時代は、社会的分業の発達と固定化、それにとともなう諸集団の地位の自存化を進めたのではないかと考えられる。自存化する地位を古墳造営によって組織し続けようとしたのが、「群集墳の時代」の論理だったのかもしれない。こうした理解が妥当であるならば、この事態の進行は、共同体が危機に瀕する状況をもたらすことを意味する。個別的利害と共同的利害との矛盾が激しくなるわけだが、このとき共同体の維持を執行する社会的職務者は、あらためて共同的利害をもって共同体の維持を企てることになる。それは、外部矛盾への転嫁、すなわち戦争への動員であり、あるいは治水灌漑のような大土木工事への動員だったのであろう。七世紀後半以降、寺院造営を受容していく理由は、このような事態を背景としていたことが考えられる。

## 第四章 古墳時代

### 第五節 名古屋の古墳時代の変貌

#### その後の名古屋中央部

断夫山古墳・白鳥古墳を築いた熱田台地では、高蔵古墳群と、その北方に続く沢上の古墳群の造営がおこなわれた。名古屋大学によって調査された高蔵一号墳は、直径一八メートル、高さ二・五メートルの円墳で、川原石を用いた横穴式石室をもっていた。石室は、胴張りの強い玄室を前後に連ねたもので、八字状に開く羨道を含めると全長一〇メートルを数えた。石室からは、ガラス製丸玉・小玉、土製白玉、耳環、鉄刀、鉄鏃、鉄製釣針、須恵器が出土した。須恵器には、装飾須恵器の壺鈕蓋がある。六世紀後半から七世紀にかけての時期の古墳と考えられる。このほか、高蔵古墳群には、小型の石棺をもつ古墳があった。沢上の古墳群では、六世紀中頃の須恵器の有蓋脚付短頸壺（写真451）を出土した花ノ木古墳がある。

また、熱田神宮には、慶応三年（一八六七）、川崎六三ほか一四名によって熱田文庫に奉納された、三連銜をもつ心葉形十字透鏡板轡と棘葉形杏葉、貝製雲珠からなる金銅製馬具（写真452）が所蔵されている。この馬具は、六世紀後葉に舶載された可能性の高いことが岡安光彦によって指摘されているが、熱田の古墳からの出土品であったならば、この時期に、そうした文物を入手し得る立場の首長が熱田にいたことになり、断夫山古墳以後も、熱田の集団の優勢は持続したことが考えられる。そして、七世紀後半に至り、尾張では最も早い時期の寺院のひとつ、尾張元興寺の造営に連なっていったのである。

瑞穂台地では、この時期に小規模な造墓活動がみられる。六世紀中頃の須恵器を出土した昭和区の村雲小学校遺跡があるほか、瑞穂区高田古墳の周囲にある直径一〇メートル前後の円墳群は、そのうちの古墳から出土した須恵器の小型提瓶などの時期から、六世紀後半以降のものと考えられる。また、昭和区の石仏にも塚がいくつかあり、古墳の可能性のあるものもあったが、詳細は不明である。そして、その後裔が、古観音廃寺や若宮瓦窯、奈良時代の極楽寺廃寺の造営主体となっていったとみることは容易であろう。

南区の笠寺台地では、桜神明社古墳の後に野屋古墳の造営が続いた。西向き横穴式石室は、敷石のある玄室が、長さ二・五メートル、幅一・二メートルほどで、入り口方向にやや開く羨道が続いていた。耳環・碧玉製管玉など装身具のほか、須恵器の細頸壺・甕・杯身、直刀などが出土し、六世紀末頃の築造時期が考えられている。野屋古墳の近くには、このほかに古墳と思われるものが二基知られており、古墳群を成していた。これらは、桜神明社古墳を造営した集団の後裔によるものと考えてよく、この古墳群が三基前後で成り立っていたらしいことから、地域集団の最小単位による造営とみなすことができる。そして、六世紀中頃の住居跡を検出した呼続遺跡や、古墳時代の遺物を出土した曾池遺跡の住人が、この古墳群をつくったとみてよい。このうち曾池遺跡では、奈良・平安時代にわたる遺物を多量に出土しており、奈良時代の住居跡が発見された戸部遺跡も含めて、曾池のあった谷地形を経営する人間活動が認められている。寺院跡こそ知られていないが、七世紀以降も安定して持続した地域勢力だったことがうかがえる。

## 第四章 古墳時代

### 第五節 名古屋の古墳時代の変貌

#### その後の守山台地

五世紀後半以来、連続して前方後円墳の造営をおこなった守山台地では、東部の小幡に小幡小林古墳がつくられる。これは、直径一六メートル、高さ三・三メートルの円墳で、全長八・五メートル、最大幅二メートル強の横穴式石室に、組合式石棺を二個擁していた（写真4 53・54）。六世紀後半以降の築造と考えられるこの古墳は、古墳時代の小幡の首長系譜を総括するものといつてよく、その位置から、小幡長塚古墳の系譜に連なるものとみられる。そして、この付近では、七世紀後半の瓦や須恵器が散布するため、小幡廃寺の存在が想定されており、首長系譜はさらに続いていった。同様に、守山台地西部で守山瓢箪山古墳をつくった集団は、守山廃寺へと連続していった模様である。小幡廃寺は、現在までに瓦当文様をもつ軒瓦が出土していないことから、系譜関係が明らかでないが、守山廃寺では押引重弧文や刺突列点文の軒平瓦や、縄タタキの平瓦が知られており、三河の寺院との関係が認められる。

守山台地の前方後円墳の背後で、それらと緊密な関係を結びながら展開したと想像される牛牧離レ松遺跡、川東山遺跡、松ヶ洞古墳群の後裔は、川東山古墳群へと続いた。

東山の丘陵頂部のものは早くから知られており、『東春日井郡誌』は「古は数多く存在したりし痕跡あれども、今は僅かに五六ヶ所のみとなれり、何れも円形式にして其の中塚上馬蹄形に頂端の崛起するを見るものあり」と記している。また、同書の写真図版「川の古墳出土物」のうちの直刀の箱書きには、「大正八年四月於東春日井郡守山町大字川山頂古墳出土 円墳直径拾八間高二間五尺伴出物祝部土器甚多而石郭巾四尺長三間五尺」とあり、直径三三メートル、高さ五・一メートルという比較的規模の大きな円墳で、長さ七メートル、幅一・二メートルの横穴式石室をもつ古墳であったことがわかる。そして、直刀とともに写る須恵器（写真4 55）も同じ古墳から出土したと考えてよく、六世紀中頃を過ぎた時期の古墳だったようである。

また東山の丘陵先端には、四基の古墳が墳丘裾を接するようにして存在した。いずれも後世の攪乱を受けていたが、一号墳は、直径三五メートル、高さ一メートルほどの円墳で、南面に「葺石」の痕跡があり、南北方向に長軸をもつ横穴式石室の敷石が確認された。古墳の内外から須恵器が出土し、石室からは直刀・鉄鏃などの武器、馬具、水晶製切子玉が出土した。二号墳は、直径一〇メートル、高さ〇・五メートルほどの円墳で、長さ四メートル、幅一・五メートルで南西方向に開口する横穴式石室の基底部分が残存していた。直刀や刀子などの武器と須恵器が出土し、六世紀中頃を過ぎた時期の古墳と考えられている。三号墳は、直径一〇メートル、高さ一メートルほどの円墳であったが、土師器の破片若干と骨片が出土した。四号墳は、昭和初期に「低い大きい小山」として知られていたが、調査時には一〇センチメートル程度の高まりに過ぎず、埴輪と須恵器が散布することから古墳と認められたものである。埴輪には円筒埴輪と朝顔形埴輪があり、すべて容窯を用いない有黒斑焼成のものであった。赤色塗彩を施したものも多い。

さらに東山の丘陵南裾では、横穴式石室に使用されたとと思われる大きな石材と、脚付短頸壺や装飾須恵器の部分とみられる鶏形の須恵器片（写真4 56）を出土した八号墳があったが、土の状態などから、付近にあった古墳の残骸とみなされた。八号墳に最も近い場所にあった七号墳は、平屋建ての家屋ほどの高さの古墳で、川東山耕地整理事業（一九二〇—一九二三）の際に取り除かれた。川原石を用いた石室から、直径一メートルほどの自然石とともに、長さ二メートル、幅一メートル、高さ一メートルほどの組合式石棺が現れ、平瓶・提瓶・高杯などの須恵器と長さ一メートル前後の直刀が出土したという。こうした石棺は、この付近では小幡茶臼山古墳や小幡小林古墳など、首長系譜の古墳に採用されたものであるため、おそらく六世紀後半以降のある段階で、牛牧離レ松遺跡・川東山遺跡・松ヶ洞古墳群という、三つの墓域を形成した集団の系譜が、この古墳において総括される事態があったのかもしれない。

なお、同様に、石棺を有した地区として北区の味鋺がある。護国院境内にはくり抜き式石棺が置かれているが、ここに移される以前は、周囲に池のある瓢箪形の山に立地した岩屋堂観音の境内にあった。坂重吉は、この瓢箪形の山を前方後円墳と想定し、石棺もここから出土したものと考えたが、定かではない。しかし、六世紀末頃の首長墓があったことは確かであろう。

## 第四章 古墳時代

### 第五節 名古屋の古墳時代の変貌

#### その後の吉根・下志段味

笹ヶ根一・三号墳の後に続いたのが、二・四・五号墳である。二号墳は、直径二〇メートル、高さ一・八メートルの円墳で、横穴式石室をもつ（写真4 57）。出土した埴輪片は、僅かであったにもかかわらず窰窯無黒斑焼成のものと、窰窯を用いない有黒斑焼製のものがあり、後者には川東山四号墳の埴輪に酷似するものが含まれていた。二号墳と同一の尾根上にあるのが四号墳で、横穴式石室が検出された。基底部を残した石室内から、須恵器・馬具・装身具などが発見されている。二・四号墳は、石室の構造を同じくすることと、主軸方向を同じくすることから想定できる墓道により、同一の集団によって築造された古墳と考えられ、墓域の共有という点から一・三号墳との系譜関係もあったと思われる。そして、五号墳は、一～四号墳とは別の尾根の先端に立地した、八メートル×一〇メートル程度の楕円形墳であった。横穴式石室が検出されたが、古墳にともなう遺物は確認されなかった。石室の開口方向から、二・四号墳とは墓道を共有しない。他の古墳をつくった集団と緊密な関係下にありながら、これらと墓域を隣接して造墓活動を新たに開始した集団の古墳といえることができる。

東禅寺一号墳は、直径一〇メートル、高さ二メートルほどの円墳で、平面徳利形の両袖式横穴式石室をもつ。玄室の側壁や敷石には酸化鉄による赤色塗彩がみられ、石室入り口の前面にはテラスが、さらに墳丘裾には列石が設けられていた。出土遺物は、耳環、鉄製直刀、透かしのない鉄製鏝のほか、装飾須恵器の臙鈕蓋付脚付短頸壺と蓋杯、高杯（写真4 58）であった。そして、東禅寺二号墳は、直径一五～二〇メートル、高さ二メートルほどの円墳であった。平面徳利形の両袖式横穴式石室は奥壁が失われていたが、全長一四メートルで、玄室の長さ七メートルと想定され、玄室の最大幅は二・四メートル、羨道の長さ七・〇メートル、幅一・六メートルから二・六メートルで、ラッパ状に開いていた。出土遺物は、耳環、直刀、銀象嵌の施された刀装具（写真4 59）のほか、提瓶・平瓶・高杯・小型臙などの須恵器である。一号墳と二号墳は、石室や墳丘の形式などからみて同一系譜の古墳とみなせるものの、そのようすにはかなりの違いがある。一号墳の装飾須恵器は、盟主的位にある古墳が通常にもつことの多いものであるのに対し、二号墳の銀象嵌刀装具は現在までのところ名古屋での類例はなく、特殊なものであった。また、二号墳は、一号墳に比べて二倍近い規模の石室をもち、一号墳が庄内川の川原石のみで構築されていたのに対し、二号墳は定光寺付近の硅岩や東谷山の花崗岩をも用いていたという調査時の観察がある。なお、このほかの三号墳、四号墳は、墳丘も石室もわずかに残る程度だったが、前者では耳環と蓋杯・無蓋高杯・提瓶などの須恵器、また後者ではガラス製の管玉と小玉、鉄鏃、須恵器が、それぞれ出土した。

笹ヶ根古墳群と東禅寺古墳群で、横穴式石室をもつ古墳がつくられる時期になると、二、三基で一単位をなす小規模な古墳群が、この一帯で新たに墓域を設けて造営されるようになる。実態不明のものが多いが、東から、日の後東古墳群（二基）、太鼓ヶ根古墳、日の後西古墳群（二基）、深沢古墳群（三基）、越水古墳が知られる。このうち、太鼓ヶ根古墳は、ほぼ南北方向に長軸をもつ長さ三メートルから四メートル、幅一メートル強の横穴式石室の基底部が確認されている（写真4 60）。深沢一号墳では、全長五・五メートル、最大幅一・五メートルほどの平面徳利形の横穴式石室が検出され、須恵器の広口壺・提瓶、土師器の甕、耳環、漆塗土製丸玉とガラス製小玉が出土した。また、越水古墳は、玄室の長さ二・三メートル、最大幅〇・九四メートル、羨道の長さ一・三六メートルの規模の、平面徳利形の小型の横穴式石室をもち、七世紀代の須恵器の平瓶が採集されている。

そしてこの後、さらに新たに墓域を獲得して造営されたのが、上島古墳群である。戦後にこれが確認された頃は、墳丘などの徴証は地上になく、地下から偶然に石室が発見されるなどしてその存在が知られていた。ボーリング調査や聴き取りによると、九基ほどの石室があったとみられる。これまでに四基が調査されたが、一号墳は、全長三・四メートル、幅〇・七メートルの平面長方形の石室をもち、七世紀前半頃の須恵器の平瓶が出土した。二号墳も、長さ二・〇五メートル、幅〇・六メートルほどの長方形の小型の石室であった。三・四号墳の石室は遺存状況が悪かったが、長軸を南北にとり、四号

墳からは耳環と須恵器の高杯・平瓶などが出土している。上島古墳群の古墳の石室は、いずれも横穴式石室が退化して竪穴式石室のようになった小型のもので、吉根の最後の古墳群である。

図 4 27

## 第四章 古墳時代

### 第五節 名古屋の古墳時代の変貌

#### 須恵器工人の古墳群

山崎川の上流に目を転じると、ここには、六基の古墳からなる城山古墳群がある。一号墳は、直径一〇メートル、高さ一・二メートルの墳丘が残るのみであったが、昭和五七年（一九八二）南山大学によって調査され、集石状遺構と遺物が出土した。調査者はこの遺構を磔床としたが、横穴式石室の敷石とみなしてよいだろう。遺物は、子持高杯、装飾須恵器の動物形配像、蓋杯、高杯、壺などの須恵器と、円筒埴輪と朝顔形埴輪の破片、直刀、耳環などであった。六世紀後半の築造と考えられる。また二号墳は、埋葬施設のようななどは不明だが、提瓶・高杯・脚付短頸壺などの須恵器片と、円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪などが採集されており、六世紀前半頃の古墳であったらしい。三号墳は、昭和三年（一九二八）に盗掘され、その直後、愛知県史蹟名勝天然記念物調査会の小栗鉄次郎によって調査・報告されている。直径一九メートルほどの円墳で、組合式石棺（写真4-61）から武器・馬具などの破片が出土した。なお、大正七年（一九一八）の柴田常恵のメモには、五百羅漢（大竜寺）の南側に「壘岩質の石槨」をもつ古墳があり、埋葬施設から五点の須恵器が出土したという。これは三号墳のこととみてよく、昭和三年の調査者が予想したように、大正七年以前に発掘されていたわけである。

ところで、柴田常恵のこのメモは、当時発掘されたばかりの別の古墳出土遺物の調査記録の一部であった。記録された遺物は、現在東京国立博物館に所蔵される須恵器の有蓋短頸壺・短頸壺・提瓶・蓋杯などや埴輪、馬具（柴田のメモによれば「轡（鉄板の断片あり）金銅」「杏葉」「雲珠」「菱形番央」）である。このほかに武器類もあった。宮内省に届けられた書類によれば、大正六年（一九一七）一月に土砂崩壊で発見されたもので、城山古墳群のある丘陵から、東に二つの谷をへだてた字金児碓の丘陵先端にあった。宮内省と柴田常恵の記録とは地番に異なりがみられるものの、現在の名古屋気象台の南側にあたる。以後、この古墳を金児碓古墳と呼ぶことにする。遺物は、おおむね六世紀後半以降のものだが、七点の円筒埴輪と一点の靴形埴輪は陶質の異形のものであった（写真4-62）。窰窯無黒斑焼成の埴輪が終焉し、その伝統や規範がほぼ失われた段階に、復古したかのごとく、しかも突然変異のようにして登場した埴輪という観がある。金児碓の丘陵には六世紀以降の須恵器窰があり、これを操業した集団の古墳とみなせるが、この埴輪は、そうした工人集団による、一回限りで後続することのないものだったようだ。また、名古屋では類例のない器形であった、城山一号墳の子持高杯も、そのような性格のものだったかもしれない。

なお、城山や金児碓に限らず、山崎川上流兩岸の丘陵一帯には、古墳時代に須恵器や埴輪を生産した窰が展開しており、その工人たちの古墳がこのほかにもあった可能性は高い。城山対岸の四ッ谷の丘陵にある三～四基の「塚」には古墳の可能性が認められる。そして、同じ丘陵の西側先端の入船山では、削平工事で埴輪や須恵器が出土したため、古墳があったとされている。さらに、山崎川中流域でも、千種区丸山町に大塚という字名があり、古墳のあったことを暗示している。

## 第四章 古墳時代

### 第五節 名古屋の古墳時代の変貌

#### 鳴海の古墳

天白川の氾濫原低地をはさんだ、笠寺台地の東側には、鳴海丘陵が広がっているが、この地域では、六世紀後半以降に古墳がつくられた。

扇川以北では、三王山遺跡や城遺跡などのように、弥生時代後期に環濠をめぐる集落が登場したが、これらは古墳時代のはじめまで続いて廃絶している。その後は、例えば三王山遺跡における五世紀前半代の住居跡と、六世紀末から七世紀初頭頃の墓墳のように、古墳時代の二時期に人間活動の痕跡が認められているが、連続したようすはない。

上の山遺跡には、積石による円墳状の遺構があり、ブルドーザーで均された後の礫面から、須恵器・土師器・埴輪・直刀・砥石が出土している。六世紀末以降の時期とみられるが、調査者は祭祀遺構の可能性も考慮して、古墳とは断定していない。上の山遺跡の北、古鳴海の谷をはさんだ対岸の丘陵先端には、山伏塚古墳と三基の円墳からなる梅野古墳群があるが、ともに詳細は不明である。さらに、古鳴海の谷の奥には、野並谷一号墳と名付けられた全長二五メートルほどの小規模な前方後円墳があった。盗掘を受けていたが、粘土を埋土とする土壌が平面で確認され、調査者は粘土槨とみなしている。古鳴海の谷は、水利の点などから人間活動が成立する条件をそなえており、古墳がつくられた可能性はある。上の山遺跡から南に下ると、塚状を呈した地形がいくつかあり、それぞれ大根古墳、狐塚古墳、薬師山古墳と命名されているが、実態は不明である。このうちの薬師山古墳は、新海池のある谷に面した丘陵上に位置するが、これと同様の立地を示すのが、鳴海大塚古墳と鳴海赤塚古墳である。

鳴海大塚古墳は、直径約二〇メートルの円墳である。周囲の地形から前方後円墳とみる意見もある。谷の方向に向けて開口する横穴式石室（写真4 63）を有し、前後に二つ続く玄室はいずれも胸張りをもち、後室は長さ三メートル、幅二メートル、前室は長さ二・五メートル、幅二メートル弱、羨道は五メートルほどが残っていた。小型甕や、鈕の部分の鳥形につくった須恵器（写真4 65）があり、ほかに人骨・耳環・鉄鏃・須恵器が出土した。なお、鳥形の須恵器は蓋の鈕の部分の装飾だが、水鳥や鶏を表した鳥形装飾が多い東海地方にあって、本例はワシタカ目の鳥類を表したものとして、犬山市の白山神社古墳出土例とともに稀少である。鳴海大塚古墳をつくった集団に、鷹匠のような専門家・集団がいたのかもしれない。鳴海赤塚古墳は、大塚古墳の南に位置する古墳で、大塚古墳より小さかったため小塚とも呼ばれた。東あるいは東南に開口する横穴式石室（写真4 64）をもち、強い胸張りのある玄室は長さ三・一メートル、幅二メートル、羨道は長さ三・一メートル、幅一・七メートルを測る。人骨、耳環、土製丸玉、土製勾玉（写真4 66）、須恵器（平瓶・高杯）、直刀、刀子、鉄鏃などを出土した。

いずれも、六世紀後半から七世紀にかけて、同一の集団による古墳と考えられるが、墳丘規模が大きく、複室構造の石室を備え、装飾須恵器をもっていた鳴海大塚古墳に、優勢を認めることができる。これらは、新海池の谷を経営した集団の古墳と考えてよいが、この谷が扇川の谷に出る付近の段丘には、雷貝塚・矢切遺跡がある。縄文時代晩期の遺跡として有名だが、五世紀以降の古墳時代遺物も多量に出土している。また、矢切遺跡の南に隣接する鳴海廃寺跡からは、古墳時代前期と六世紀後半の住居跡がみついている。これらの遺跡は、鳴海大塚・赤塚両古墳に近接しており、その造営集団の集落であったと想定することができるが、六世紀後半に至らなければ古墳築造を果たせなかった点に、鳴海の古墳時代の特質があるといえるだろう。この地域では、七世紀後半以降、須恵器生産をおこない、八世紀には鳴海廃寺を造営する。

なお、山崎川上流や鳴海のほかに、守山区の八竜古墳（写真4 67）や六ヶ塚古墳群、瑞穂区の井守塚古墳、中村区の岩塚古墳群などで、六世紀後半以降の古墳造営がみられる。このうち、八竜古墳は、谷の最奥部の丘陵上に位置し、正面の谷を経営した集団の墓域と考えられるが、例えば鳴海の新海池の谷に比べればこの谷は零細であるため、農業生産一般に依拠した集団という印象は弱い。また、岩塚古墳群は、庄内川氾濫原に立置する古墳群で、一号墳は石棺をもつという。材質や形状は不明だが、これが事実ならば、河川交通を媒介として産地から運ばれたものと思われ、同様に石棺をもつ古墳の存在が知られる味鏡・守山台地・熱田台地・山崎川上流の集団との関係が注目される。氾濫原低地の自然堤防上には、時期を限ることなく、このほかに古墳群の存在した可能性が高い。

## 第四章 古墳時代

### 第五節 名古屋の古墳時代の変貌

#### その後の大高・名和

以上は、六世紀前半までの時代を、その共同体の維持を拡大的に展開した集団の、その後のようすである。また、六世紀後半に至って、古墳造営を開始した地域も含めた。こうした地域は、七世紀後半以降に寺院を造営したり、寺院をつくる集団に添いながら、勢力の展開を果たしたようである。その一方で、前代に前方後円墳を造営することはあっても、規制を受けた地域があった。そのひとつ、大高・名和のその後は、どうだったのだろうか。

大高川の左岸西側には、三基の古墳からなる東海市の三ツ屋古墳群がある。一号墳は横穴式石室を有し、六世紀後半の須恵器を出土した。一号墳の傍らからは子持勾玉も発見されている。この地域では、五世紀の空白期をはさんで古墳造営を続け、七世紀後半以降の瓦を出土する東海市のトドメキ遺跡や名和廃寺といった寺院の造営へと連なっていたものとみられる。

一方、大高川左岸東側では、丘陵上に姥神遺跡、神宮戸遺跡、馬背遺跡などが、また砂堆上には儀長遺跡、菩薩遺跡など古墳時代の遺跡が知られており、斎山古墳以東の大高に古墳があった可能性は高い。例えば、京都大学理学部自然人類学教室には、大正二年（一九一三）に「尾張国知多郡大高町古墳」から出土した人骨が所蔵されている。残存状態のよい二点の頭骨には、あたかも石棺や石槨のような場所から出土した印象を受けるが、古墳に関する情報はない。いずれにしても、こうした東側の集団を背景にして、七世紀後半の大高廃寺が造営されていったと考えてよいだろう。

大高・名和の集団は、一時的に規制を受けたものの、六世紀後半以降は、他地域と同様に古墳造営を果たし、寺院造営をおこなっていった。これは、先に見た鳴海の勢力の台頭と無縁ではなく、むしろ連動したものであったと思われる。

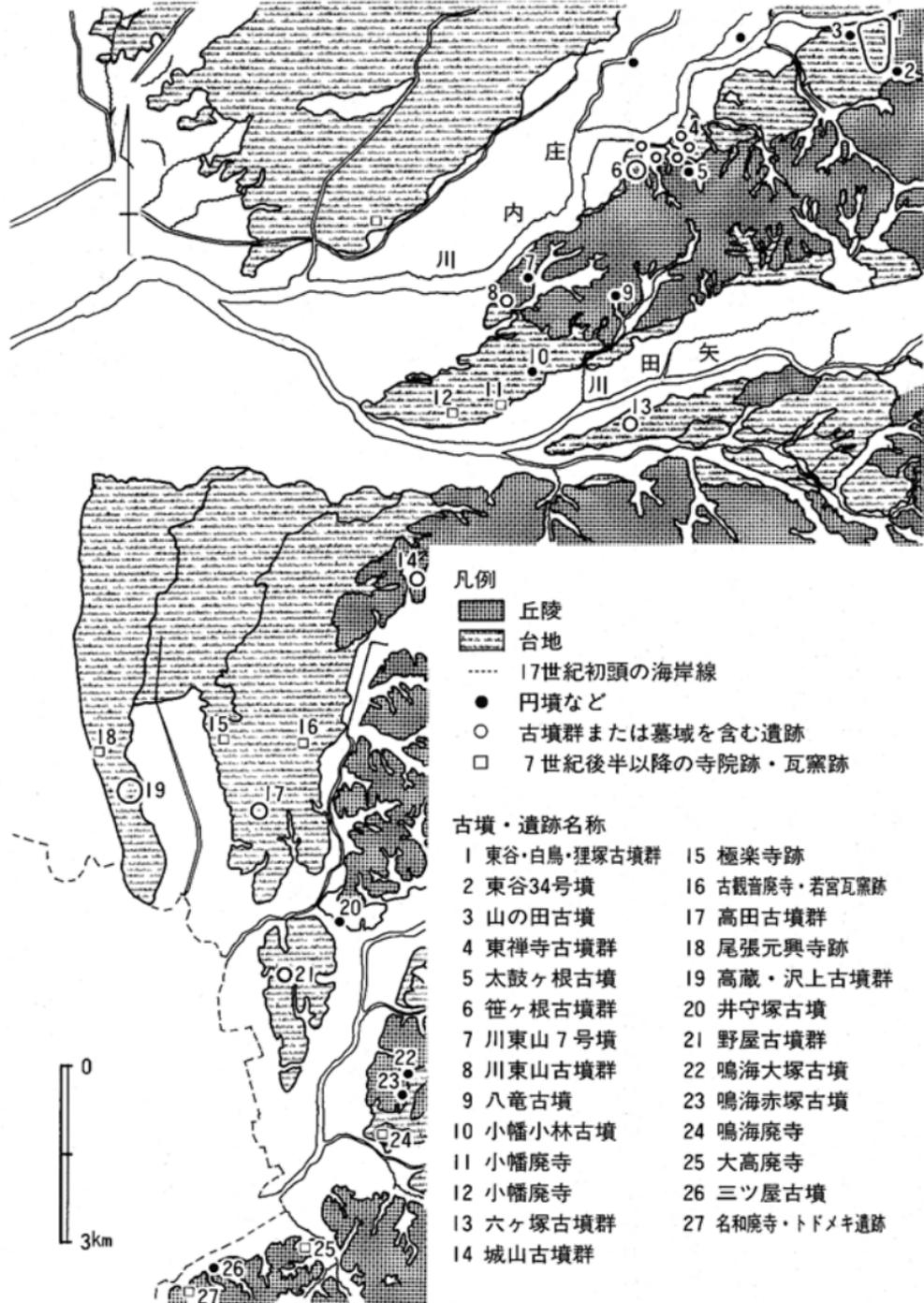


図4-26 6世紀後半以降の名古屋の古墳等分布図  
 (「庄内川治水地形分類図」を基礎図にして作成)

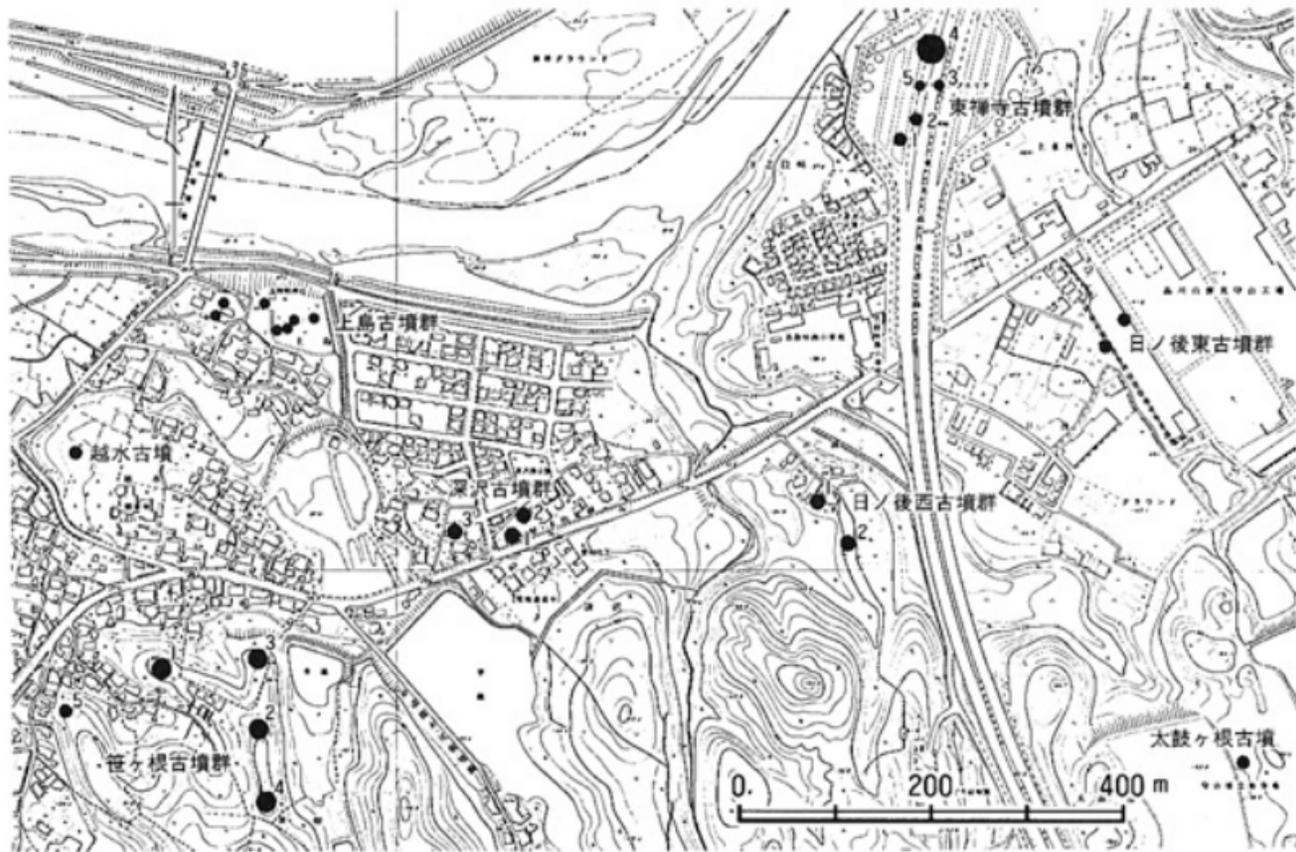


図4-27 吉根・下志段味の古墳分布図 (番号は古墳の号数)  
 (「1:2,500名古屋都市計画基本図」86-1吉根・  
 86-2下志段味を基礎図にして作成)